医療・健康

向き合う

一般社団法人
ＶＨＯ－ｎｅｔ理事　増田 一世さん ③

大学を卒業し、精神障害者の地域生活を支える「やどかりの里」（さいたま市）の研修生になった時、「大学で学んだことはいったん棚上げしてください。あなたのお師匠さんは目の前の精神障害のある人です」と先輩から告げられた。

そこで出会った彼らは精神科病院での入院経験を経て、回復を目指し、幻聴などの症状に悩まされながらも、これからの生き方を模索していた。彼らと時にぶつかりながら共同作業する中で学んだことが私の原点だ。

ＶＨＯ－ｎｅｔで「患者と作る医学の教科書」（日総研出版）の出版が提案された時、ＶＨＯ－ｎｅｔだからできる企画だと思った。早速、プロジェクトチームによる教科書づくりが始まった。患者と専門職が共に創りあげるところが大事なポイントだった。

本書では25疾患が取り上げられている。乳がんや心臓病といったよく耳にする疾患から、患者数の少ないプラダー・ウィリー症候群、中枢性尿崩症といった疾患も取り上げられている。これはＶＨＯ－ｎｅｔの幅広さを物語っている。患者の立場で生活者として病をどう捉え、その治療のあり方や課題、悩み、医師や看護師に望むこと、そして病気と共に生きる姿勢が表されている。

私の職業人生が患者から学ぶことから始まったように、医学生や看護学生たちがこの本に向き合い、生活者である患者の姿から学ぶことは患者中心の医療の実現に欠かせない。

私は統合失調症体験者の3人と執筆の機会を得た。4人で集まって編者から示された11項目の議論を始めた。疾患の説明などには経験値に加え客観的な視点も加えたが、「回復への道筋」には彼らの体験が反映されている。病気を治すのではなく病気と共に生きること、本当の回復は自身が誰かの役に立っていると実感できること、過去を悔いることから将来への夢をもつこと――とまとめた。

発行された2009年以降、1万冊が世に送り出された。時間を経ても内容は決して古びてはいない。発行には製薬大手ファイザーの大きなバックアップがあった。これも新たな企業との連携の形であった。

共同創造（Ｃｏ－ｐｒｏｄｕｃｔｉｏｎ）を基本とするＶＨＯ－ｎｅｔの取り組みはこれからも続く。

患者と作る医学の教科書

日本経済新聞　2023年4月25日（火）